#006 お天気雑記帳

義経伝説

この『お天気雑記帳』で「桶狭間の戦い」や「関ヶ原の戦い」を紹介したところ、他の合戦も取りあげてほしいとの要望を受けるようになりました。最も多いのが武田信玄・上杉謙信の「川中島の戦い」。実は、これ、なかなか難しいのです。川中島の戦いのように霧が勝敗に影響した合戦は多いのですが、霧を再現することは容易ではありません。霧の濃淡の記録が少ないことが、その理由です。次に多いのが、三国志の「赤壁の戦い」。諸葛孔明が風を読むというのは面白いのですが、これは創作といわれています。面白いテーマが見つかっても、史料が不足して検証できないことがあります。たとえば、義経伝説のひとつ、源平合戦の「屋島の戦い」の快進撃があります。

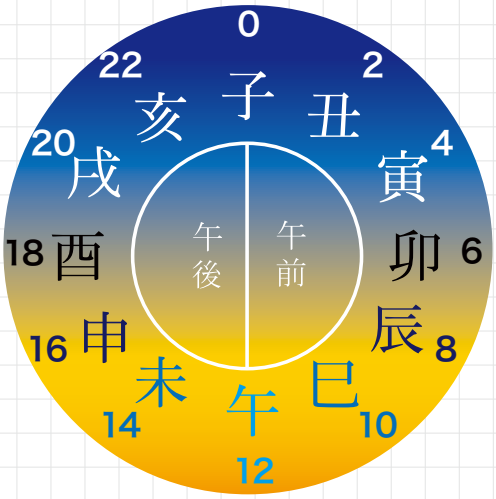
義経の行程について、公家の九条兼実の日記『玉葉』に、元暦２(1185)年２月16日に大阪を出港し、17日に阿波に着き、18日に讃岐の屋島で合戦をしたという記録があります。一方、鎌倉幕府の公式記録『吾妻鏡』には、18日の丑の刻(２時)に大阪を出港し、卯の刻(６時)に阿波に着き、19日の辰の刻(8時)に屋島に到着して戦ったという記述があります。

ふたつの史料の日付が違っているのは、日付が変わる時間の違いが関係しています。正史などの公式記録は、現在と同じように深夜０時の子の刻で日付を変えて記録しています。でも、時計を持たない当時の人たちは、眠りにつくまでが今日、目を覚ましてからが明日でした。各地の寺で朝のお勤めの起床の鐘が鳴る丑と寅の間の時刻(３時ころ)に日付が変わると考えていたようです。そのため、たとえば手紙や日記に「16日丑の刻」とあれば、「17日２時」を意味しています。

２月16日に大阪を出港という『玉葉』の記録は、この日に上皇の使者と面会をしていますので、実際に出港したのは16日の夜か17日未明です。

『吾妻鏡』の日付が一日遅れているのは、手紙や報告書を整理するときに、「16日丑の刻出発、翌日到着」とあるのを「17日出発、18日到着」と解釈し、屋島の戦いを19日にしたという説があり、私もこれが真相ではないかと思います。

ふたつの史料から、義経が17日未明に大阪を出港し、17日朝に阿波に到着し、18日に屋島の戦いがあった可能性が高いと思われるのですが、通常、大阪から阿波まで海路で３日かかるのを、わずか４～６時間、阿波から屋島まで陸路で２日かかるのを、１日で進撃したことになります。不眠不休の強行軍で、にわかに信じがたいのですが、本当でしょうか。



通常３日のところを４～６時間で渡海したという義経伝説を、今のフェリーの速度と比較して、「ありえない」と結論づけている説もありますが、私は史実に近いと考えています。昔の船でも、追い風のときの速度は今の船とあまり変わりがなく、４～６時間あれば十分に可能と思われるからです。

時代は違うのですが、江戸時代に追い風を利用して短時間に移動していた記録もあります。

元禄のころから、活け船を使って、釣った魚を生きたまま遠方の消費地に運ぶようになりました。長崎の五島付近では、大型の網を使ったマグロ漁やブリ漁が盛んでした。冬場、強い西風を利用して、活きたままのマグロやブリを、瀬戸内から紀伊半島潮岬をぬけて江戸まで１週間で運んでいたという記録が残っているそうです。この速度なら、大阪から阿波まで4～6時間も不思議ではありません。

『平家物語』や『源平盛衰記』に、大阪を出港する前日に強い南風が吹き、雨が降った後に強い北風に変わり、その強風を利用して渡海したという記述があります。この天気の推移は、春一番のように低気圧が日本海を通過したことを示しているようです。低気圧が接近すると中心に向かって強い南風が吹き、寒冷前線が通過するときにザーっと激しい雨が降り、寒冷前線通過後は強い北西風が吹きます。ただ、物語ですから、創作もあり、本当に強い風が吹いたのかどうかは何とも言えません。もし、手紙や日記にこの天気の記録が残っていれば、義経の行動や合戦の日を特定できるので大発見ですが……。

気象予報士 (株)富士ピー・エス顧問　松嶋 憲昭